

ちよつと危ない色艶都々逸
笑って許して！
Part 8 短冊本



ゆうほ

宝探しに 似てると知った

願い叶わぬ 夫婦道

遊びびと

かねの草鞋で 探したおまえ

金のかわりに 福みつけ

ゆうほ



死ぬまで一緒と 誓った言葉

今じゃ死ぬ前 逃げ出そう

リーベ

あなたいなりや 涙も出るが

いれば愚痴でる 角がでる

ゆうほ



浮気するなら わたくしよりも
ずっと綺麗な 人にして

さくら

妻がおかめで 浮気をしたに
朝に顔みりゃ おかちめんこ

ゆうほ



そしたら納得 出来たでしように
なんであんなに ブスなのよ
さくら
おかちめんこも 見ようでたのし
あきがこぬよな 花の笑み
ゆうほ



足の先まで 唇這わせ

突き上げ落とす 主の技

足に絡んで 締め付けられりや

逃げる手もなし 俵締め

遊びびと

ゆうほ



人の情けと 浮世の義理を
拾って捨てて 五十年

さくら

義理で沈んで 情けに流れ
浮世棹さし 舵をきる

ゆうほ



あちらのあやめが 手招きしてる
こちらのあやめは 袖をひく

さくら

あやめ枕で ふたりの夢を
朝の菖蒲湯 もう一度

ゆうほ



俺が好きかと
きかれりや好きと
言わにやならない

諭吉さま

ゆうほ



惚れているから
絡んでみたい

嘘に本音を

混ぜる酒

ゆうほ



馬鹿なわたしに

惚れてる男

心広いか

大馬鹿か

ゆうほ



嫌な男に

貢がれるより

惚れたたぬしさん

貢ぐ恋

ゆうほ



あんな男と
強がり言つて
愚痴がのろけに
かわる夜

ゆうほ



甲斐性と根性

おまえにやないが

子作りだけは

お手のもの

ゆうほ



浮気玉撃ち

戻って夜戦

あげ足とられ

玉もつく

ゆうほ



信用されてか

愛無いゆえか

家をあげよと

不動妻

ゆうほ



口説き文句に
酔わされながら
財布中身も
酔えそいな
ゆうほ



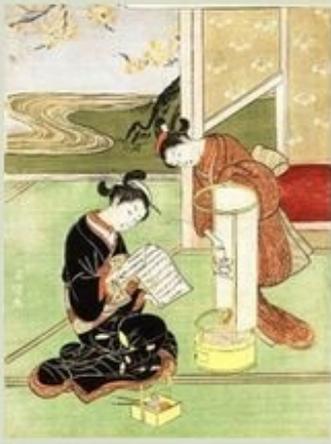
暗い浮世を

これ幸いに

提灯記事の

多い事

ゆうほ



あなたなまこで

わたしはは貝よ

さしみコリコリ

つまの上

ゆうほ



別れ悲しい

マス酒飲めば

ひとり手酌で

鎮魂す

ゆうほ



乗るときや先に

下見が大事

下手な運転

えきとばす

ゆうほ



せみが木の枝

尻振りつつく

負けてなるかと

丸太上

ゆうほ



野原の逢引

カエルがみてる

おたまじやくしの

行く末を

ゆうほ



おれも男だ
まっ時今だ
なさねばならぬ
君となら

ゆうほ



臍下三寸

おまえが狙う

かみなりさんなら

しびれるに

ゆうほ



穴場リサーチ
しっかりしたと
言ったおまえは

墓穴掘り

ゆうほ



あたしやタコつぼ
極楽浄土
入りやいくまで

壺の中
ゆうほ



ボケにやツツコミ

なくてはならぬ

メシべ濡らして

ボケの花

ゆうほ



あんな女の

口車乗り

すぐにはっしやは

口おしい

ゆうほ



観音菩薩は 三年止まり
あとは睨みの お不動さん

リーベ

阿吽呼吸の 金剛力士
今は立たない 大仏に

ゆうほ



日照り終われば 水いらぬもの
 雨になつても なぜ通う
 リーベ
 水が足りたら 肥やしもいるし
 虫も進わねば 刺されるさ
 ゆうほ



琴の弦とて 好かないひとにや

音色濁りて 騒がしく

遊びびと

君の琴線 触れなきやならぬ

思案六歩の ことの前

ゆうほ



俺に強がり 無駄だと知らず

がんばる姿 いじらしく

遊びびと

惚れた弱みで すぐおれるけど

折った体は ぬし預け

ゆうほ



人の道には 外れたけれど

生きる悦び この身知り

遊びびと

道がひとつじや 浮世は無粋

色々あって それも道

ゆうほ



こころ変わりには わかっていたわ
いつかこの日が 来ることも

さくら

愛した「あなた」 「あの人」となり
過去でいきてる 人になる

ゆうほ



さんざん悪口 言ってたくせに
いつのまにやら のろけ酒

さくら

悪い所は 山ほどあるに
たったひとりぬしに惚れ

ゆうほ



それでいいのよ 正直だけが
とりえのあなたが 好きなのよ
さくら

言ってる時は 馬鹿正直が
どこかで正直 落とす馬鹿
ゆうほ



おまえ蒲魚 この竿使い

釣って誰にも渡しやせぬ

遊びびと

つりをするなら 我慢と竿で

竿先誠 つけりやよい

ゆうほ



足の先まで唇這わせ

突き上げ落とす 主の技

遊びびと

ひとつ猪口もち やりとりすまし

あけばしとねで 鞆おさめ

ゆうほ



恋のメールを

やりとりしても

電池なくなりや

消える恋

ゆうほ



彼氏の
数だけ
携帯持
って

男さばくが

魚ダメ

ゆうほ



携帯なけりや
恋始まらぬ
終わりや男と
一緒捨て

ゆうほ



彼氏多くて

名前と合わぬ

待ち受け画面

顔確認

ゆうほ



メール残して
デートの前に
読んで確かめ
続け恋

ゆうほ



マナーバイブを
胸元いれりや
ぬしの呼び出し
震えいく
ゆうほ



恋も携帯
魔法にかかり
周り気にせず
無我夢中

ゆうほ



携帯あいてに
頭を下げる
終わりや恥ずかし
電車中

ゆうほ



若者ぶつて

メールをうてば

「マジ」「ウツソー」「ヤバイ」

事たりる

ゆうほ



あなた便利と
携帯呉れりや
俺の居場所を
いう間者

ゆうほ



神が作った
人間ならば
人の過ち
神ト子り
ゆうほ



お菊阿部定

待ってるからにや

お前ゆっくり

後でこい

ゆうほ



あの世 芸人

沢山 いれば

楽しい 冥途

なり そうな

ゆうほ



不老不死では
冥途は混むが
予約せずとも
よいのやら
ゆうほ



三途の川は
六文銭で
仏滅割引
何故に無い

ゆうほ



浮世で散々

仕分けをされて

冥途地獄じゃ

浮かばれぬ

ゆうほ



うちの鬼嫁
あの世

に行けば
俺の籍抜き

鬼籍入る

ゆうほ



高い戒名

特急料金

速く地獄へ

行けるよに

ゆうほ



冥途の旅も

ミシエランガイド

旗持ちマニユアル

おのぼりさん

ゆうほ



あの世神さま
色々いれば

冥途で迷う

うぶ仏

ゆうほ



うちのぼんさん
男色通じや

冥途へ引導

釜地獄

ゆうほ



カミさん無口で
只見てるだけ
あの世地獄じゃ
人でなし

ゆうほ



母に女の匂いを感じ

何故か分からぬ 反抗期

巣立ちしなけりや ならぬおまえ

離したくない 母ごころ

ゆうほ



女を知って 母なる人の
業の深さが 分かる時

赤の他人の 妻ならなおに
おもいおもわれ たてること

ゆうほ



母もひとりの人だと知って
拘りすてた 母息子

もしも来世があるならきつと
おまえをむすこと 母なさけ

ゆうほ



女の話に 女が泣いて
一緒に呑んでる なみだ酒

さくら

女の愚痴に 鶯あきれ
ホーホーホットケと

捨て台詞
ゆうほ



肌身離さず 大事にされて

貴方の携帯 恋敵

月うさ

揉みなでられ 皺伸ばされて

俺より大事 諭吉殿

ゆうほ



ふたりの時間 邪魔してくれる
泣く子と携帯 勝てやせぬ

月うさ

俺の乳だと思っただに
タダで飲んでる わが息子

ゆうほ



何を急いで 西方浄土

ゆるりこちらで 嘘の恋

遊びびと

地獄の釜も 休みに帰りや

ツバメ居座り 巣を作る

ゆうほ



心安らか 落ち着く先は

無欲無我なる 仏道

遊びびと

地獄の沙汰も 浮世の慾も

金がもの言う 修羅の道

ゆうほ



グラスの底の 琥珀の酒を

そつと揺すって 別れ告げ

さくら

お尻触って 様子をさぐり

良けりや尻あげ 注ぐ酒

ゆうほ



みどりの黒髪 どうして染める

親からもらった 宝もの

さくら

頬に振り落つ 黒髪乱れ

今や放つと 流鏑馬で

ゆうほ



ひとり寝る夜の この黒髪の
重さに泣いた 夜明け前
さくら

君の黒髪 匂いが染みた
枕抱きしめ 窓の月
ゆうほ



ふつつつ醸して お酒ができる

私の恋は ひや酒か

さくら

ふたり心に 恋種入れて

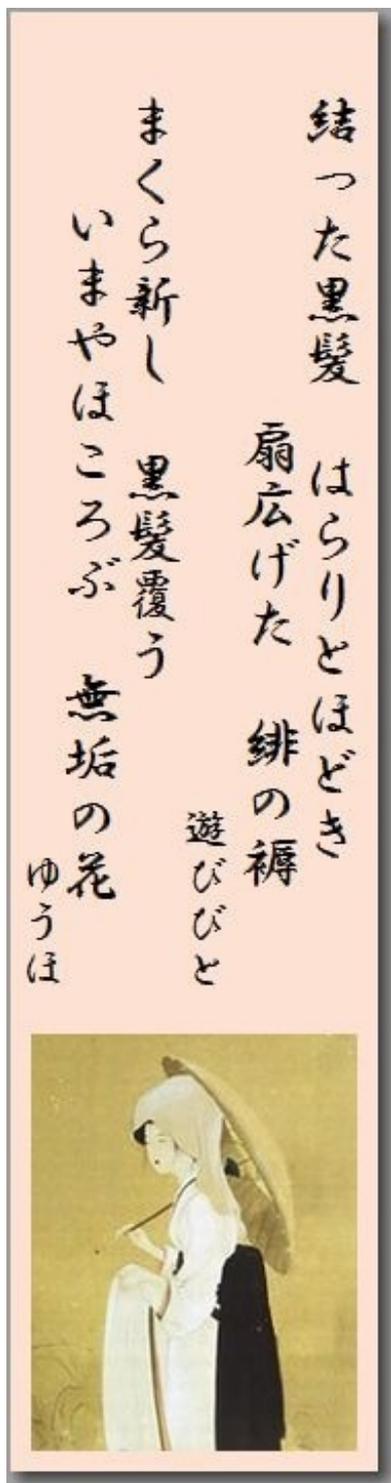
恋酒できりや さしさされ

ゆうほ



ゆびで おくれげ 整え 上げりや
主の吐息で 身が震え
遊びびと
その身震えて 落ちそにみえて
女の意地 に すがる君
ゆうほ





5月10日～13日位まで、マレーシア滞在ビザ更新の為、
タイのBetonという国境の町へバイクで温泉旅行を兼ねて行きますので、
数日間お休みさせていただきます。

ツボをおさえる

指圧の技は

どこのどのなたの

為にやら

ゆうほ



お金なんぞは
浮世の方便
だけどそいつに
位かされる
ゆうほ



酒も女房も
年経て熟し
したでころがし
かおりたつ

ゆうほ



ないてせがんで

手のうちはいり

すべてをついばみ

次の手へ

ゆうほ



小御舞

こころの君は
歳ふえないで
想う私は
皺ふえる

ゆうほ



今爪
化粧鏡
画

ゆうほ
画

壺に入った
サイの目ふたつ
何故にピンピン
まつのやら

ゆうほ



風と鯉に
なびいて泳ぎ
頭も腹も
ない真鯉
ゆうほ



ぬしが来たかと
高下駈はけば
音が白状
急き心

ゆうほ



別れいうなら

弄るまえの

わたしにもどし

かえしやんせ

ゆうほ



迷い迷って 此処まで来たが
何処へも出られぬ けもの道

さくら

人もけものも 外れた道は
孤独相手の 二人連れ

ゆうほ



あの人真面目で くそ真面目なの
ちよつと息抜き したくなる
さくら

四角四面も まああるい君に
包みこまれりや 骨抜きに
ゆうほ



あんないい人 見たことないと
言われているが ちよつとねえ

さくら

おもてうらない 良い人だけど
うすくペラペラ すけすぎる

ゆうほ



さんざん味見を しておきながら

賞味期限は まだあるよ

さくら

味見してから 食い逃げならぬ

腹がふくれりや ぬしのもの

ゆうほ



憎い仕打ちの あん畜生に
飲ませてやりたい とりかぶと
さくら

たった一度で もうお帰りか
のませてやりたい あかまむし
ゆうほ



今夜は少し レモンを入れて

あなたと呑みたい サイドカー

さくら

女殺しと 異名をとった

呑んで乗ったら サイドカー

ゆうほ



素敵な夜は あなたとふたり
夢見るような カクテルを さくら
きみはカクテル わたしやスツポン
つまみウナギで 精をつけ
ゆうほ



熱い心で わたしを撃って

今夜あなたはハンターね

さくら

打ちそこなったら

逃げねばならぬ

単発銃の

はがゆさよ

ゆうほ



キザなあなたもたまにはいいわ

胸に一輪赤いバラ

さくら

武骨者故花の名知らぬ

道で出会うが 女郎花

ゆうほ



悪魔の声か お前の声か

馬鹿だ馬鹿だと 声がする

さくら

ほんの少しの 我慢も出来ず

いつも中折れ 半端もの

ゆうほ



妻を寝取られ 哀れな男

後ろで笑う 声がする

さくら

ツキを戻そと パチンコ競馬

うちの憑きカミ 見放され

ゆうほ



夜を重ねた わたしの肌は

あなたなしでは 生きられぬ

さくら

あなたなしでは 夜眠られぬ

いたならもつと 眠られぬ

ゆうほ



とつくの昔に 時効やないか
おばはんよろしゆう たのんます
さくら

終身刑で 執行猶予
何をえらそに もうギロチン
ゆうほ



少し辛口 羨みもあって

ほんにあなたは いい男

さくら

白いもち肌 甘みもあって

男立ててる いい女

ゆうほ



ゆるるかんざし愛しいおまえ

俺の心をまた揺らす

リーベ

俺のかんざし抜きさし試し

おさめた顔にあかみさす

ゆうほ



そぼふる雨の 相合傘に
おまえは舞妓 手が出せぬ

リーベ

さした傘へと 呼びこまれたら
雨でかさなり 濡れ姿

ゆうほ



思い直して 帰ってみれば
 見知らぬ ヒール 玄関に
 リーベ
 ぬれ場 主な板 亭主と女
 女刺し身で 亭主つま
 ゆうほ



思い焦がれた 座敷のあなた
 赤い三味系 切れはせぬ
 リーベ
 にわかツバメと 三味線抱けば
 撥にあたって 糸切れる
 ゆうほ



頭うなづく
理詰めのハイが
情けながさ
首をふる

ゆうほ



枯れ木なつても
火がつきや燃える
恋の不審火
君のよう

ゆうほ



ダメと言ったら
手を引くなんて
そんなあんたが
ダメな人

ゆうほ



お前しかない

思ったちぎり

俺しかなかった

お前とは

ゆうほ



嘘も誠も
涙は同じ
どちらも
時も乾く
時がたちや
ゆうほ



高飛車かまえ

迫ろと無駄さ

さしてあまたの

恋将棋

ゆうほ



カスをあつめる
花札癖が
恋の勝負も
カスで負け
ゆうほ



「いくも」遊く」のも

天国だけど

かたや片道

遊ったきり

ゆうほ



ぬしどぬれ場は
雨夜の月か

ささぬ傘なら
いりもせぬ

ゆうほ



氷の君を

あいのみっかい

刻みとけたら

なごみ水

ゆうほ



今夜もお店に 来ているけれど

私のことなど 知らんぷり

さくら

押してダメなら 引いても見たが

誰がかけたか 鍵女

ゆうほ



自分であること やめないために
自分に乾杯 オールドパー

さくら

これでいいのさ 天才なのだ
バカボンパパの バックボン

ゆうほ



しがらき親子も 仲間に入り
おらが故郷さの 歌自慢

さくら

俺も大好き 処女時の床が
狸ばやしの 十八番

ゆうほ



逃げた女房を

いつまで追うの

世の中半分

女だよ

さくら

星の数ほど

女はいても

俺に寄り添う

星どこに

ゆうほ



愚図のお前にや あの花房は

手には負えない 女だよ

ともえで床に たて四方固め

しめて落とされ もう一丁

さくら

ゆうほ



嘘をつくなら 上手について

あなたの嘘は すぐにばれ

さくら

浮世黙って いくのが男

女位かせの 嘘ならば

ゆうほ



嘘も方便 傷つけまいと

優しい嘘もあるかもね

さくら

知って怒らぬ 言われて本音

知れば傷つく 嘘ばかり

ゆうほ



小さな灯りを 頼りに生きる

路地の居酒屋 ほたる酒

さくら

猫をあいてに おかみがよそ見

今だネコババ ぬすみ酒

ゆうほ



飲み屋の飲み代 一年だけど

あなたの時効は ありません

さくら

時効なくとも もう俺無効

たつて入金 気持ちだけ

ゆうほ



他の男に 気の有るそぶり

主の不機嫌 ほくそえみ

遊びびと

あんなはげ山 きがあるはずは
無いとおもえば きにならず

ゆうほ



媚びることなど 女の恥と

背筋伸ばして 抜くシヤンパン

遊びびと

ふたり意地はりや 抜き差しならぬ

コック捻って ガスを抜く

ゆうほ



男の嘘と 女の嘘が
どこで手を打つ 恋路かな
遊びびと
嘘と誤解で 恋始まれば
それを誠に するが恋
ゆうほ



誰も通らぬ 里道抜けて

辿り着いたり 恋灯り

遊びびと

先の見えない 恋船のれば

ともに浮かぶ瀬 潮が満つ

ゆうほ



今夜は主と 膝を枕に
指で遊んで 三味の糸

真恋

私の膝で 見る夢だれぞ
指の動きに ずれをみる

ゆうほ



きりりと締めた 夏帯だから

誰もほどけぬ 時もある

さくら

帯の謎かけ 解かねばならぬ

そこは入口 袋小路

ゆうほ



身八つ口から手を差し入れて
そつと触れて欲しいのに
裾を割ったら 立膝姿

さくら

壺でふられて チンチロリン

ゆうほ



妻と言う座は 求めはせぬが
女の意地を 通したい

さくら

妻と毒の字 似ているようで
下手な扱 い 地獄見る

ゆうほ



だけど淋しい ひとりの夜は
そつと覗くの ほたるかご
さくら

尻を光らせ 恋する螢
頭光って 送螢
ゆうほ



何を気取って バツハじやないの？
バツカじやないのよ 分かってる？

さくら

この頃活躍 してるじやないの
原奏地方で シューベルト？

ゆうほ



あんたにやお似合い 唐獅子牡丹

あの歌聴くと 泣けるけど

さくら

牡丹の露が 唐獅子守りや

俺はお前の 露で活き

ゆうほ



バツハと牡丹じゃたいそな違い
だけど心は同じだよ

さくら

オタマジヤクシが踊っているよ
バツハも俺もダイジュツ家

ゆうほ



消えそで消えない 二人の愛は

日陰に咲いてる しやがの花

さくら

ふたり木陰で 蒸かしたいもを

知らぬ顔せど くさいなか

ゆうほ



ちよつと聞いてよ ひどいじゃないの

俺より高い 犬の服

さくら

パンツ特売 パパミゼラブル
犬はチャンネルで ワンダフル

ゆうほ



犬のごはんは高級品で

俺の昼飯 ワンコイン

さくら

安産祈願に 子宝犬を

撫でて祈って ワンマイル

ゆうほ



犬ねこ呼ぶときや
俺に用事は
ねこなで声で
あごしやくり

さくら

お前の為
に
俺は犬死
猫小判

ゆうほ



鏡眺めて 妻自画自賛

首をかしげる 子ヤウ子ヤウが

うちの鬼嫁

床の間すわり

威风堂々 グレートデーン

遊帆

ゆうほ



パパ朝帰りワンワン吠える
二回じゃないと指をたて
顔が妻向きや尻俺向けて
上下知ってる
遊び犬

遊帆

ゆうほ



夫婦げんかです家進い出され
遠吠えしては犬となく

遊帆

浮気いいわけ言わぬが花さ
犬に論語で棒あたる

ゆうほ



今夜はお前に 狙いを定め

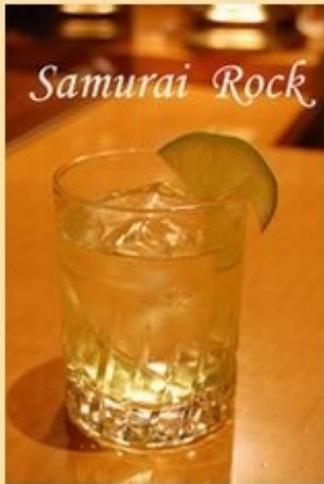
サムライロックで 攻めてみる

さくら

氷の微笑み 冷たい君を

口説き寝床で オンザロック

ゆうほ



お酒を呑めない あなたのために
そっとすすめる シンデレラ

さくら

零囲気だけで いっちやだめよ
これから味わう オーガズム

ゆうほ



四月の雨は 私の涙

少し冷たい 別れ酒

心残して 呑む酒ウヅキ

花残月 西の空

さくら

ゆうほ



五月の雨は あなたの希望

恋が芽生える 木の景酒

さくら

木景取月 盃満たし

サツキ呑んだに またつがれ

ゆうほ



盃持つ手が ふと止まる夜の
愛のつらさを 飲み込んで

さくら

明日は出船さ 荒海越える
水盃を 交わす夜

ゆうほ



冷えたお酒も 体にいれりや
ぽかぽか温い 人肌

さくら

俺のどつくり 人肌なかで
どつくり 爛され ぼれだす

ゆうほ



ほんとはあなたに ほどいて欲しい
あんまり酔っては ほどけない

さくら

酔ってとけない 謎かけ帯の
ラチが用かなきや

馬乗れぬ

ゆうほ



社長時々

どこかに消える

幽霊会社じゃ

足つかず

ゆうほ



ヒラのオイラも
夜ならシヤツ子ヨさ

ヒシヨを片手に

尻叩く

ゆうほ



上司お婆

鶏がらみたい

スミをついて

あらさがし

ゆうほ



詫び (侘び) と 錆 (寂) なら
もう身についた
今が 廢車 (敗者) か

定年か

ゆうほ



花の定年

デパ地下がよい

家の仕切りが

ままになる

ゆうほ



誰が貼ったか
猛犬注意
夜ごと褥で
噛みつかれ

ゆうほ



夜にせめられ
手をあげたなら
足をあげよと
またせめる

ゆうほ



隣の後家の
水やり手入れ

夜梅(よばい)楽しみや

後ろ指

ゆうほ



冬のベランダ

煙草がともし

肩身狭いが

パパ螢

ゆうほ



まさかの坂道

ふたりで押して

越えた日もある

夫婦道

ゆうほ



儂い縁の 二人の恋は

朝に露おく 露草か

さくら

昨夜しつぽり 濡れたがためか

朝の花びら 白露が

ゆうほ



切るに切れない 情けの川に

流れ流され 迷い酒

恋の始まり 早瀬と成って

深い思いの 淵となる

さくら

ゆうほ



肌身隠せど

残り香消えぬ

黒いベールに

想い秘め

遊びびと

真つ黒づくめじや

闇夜のガラス

如何に落とそう

闇鉄砲

ゆうほ



月の雫か 冷たい酒に

恋の涙が こぼれ落ち

逢瀬重ねて 契りを結び

しずくいく先 月の道

さくら

ゆうほ



あなたの胸は 揺り籠なのね

やっと知ったの 五十路来て

老いて赤子に 戻るのがならば

あまえたいよな 君の胸

リーベ

ゆうほ



逢瀬終わりて

残り香抱いて

涙紫陽花

身を濡らし

遊びびと



ぬれりやお前の

色なる白が

あたしや染まらぬ

こころ赤

ゆうほ



溢れる涙

まつ毛を濡らす

溺れる海の

恋人魚

月うさ



わたしの涙

こいしい君へ

愛を届ける

流れ星

ゆうほ



誰の横顔

見つめているの

そばにいるのに

遠い目で

月うさ



好きなんだよと

老いらくの恋

お猪口なみなみ

切々と

リーベ



持って重たい

札束よりも

もっと重たい

ものがある

さくら



主の下駄見て

わたしの下駄は

心弾んで

横になる

ゆうほ



憎いうちなら

まだ脈あるが

知らん顔では

脈もない

ゆうほ



春画大奥

たつての頼み

かけば殿さま

いかりたつ

手鎖刑歌麿



侘びと寂など

猿にはむりか

キンとオマンで

臍茶かな

恨み利休



お酒女が

こよなく好きさ

あるがまま生き

これ浮世

閑き直り一休



納言嫌いよ

枕草子

おまえお似合

枕絵さ

紫式部売言



旦那の浮気

暴露し本を

枕片去る

しきぶ床

清少納言買言



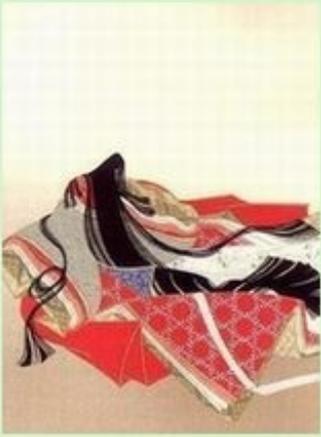
花は褪せても

あたしはどわに

あきたこまちで

名を残す

自惚れ小野小町



わたしや男よ

オカマじやないわ

カマじや荒海

沈んじやう

オカマ小野妹子



祇園総揚げ

遊んで時を

吉良が病死なりや

オクラ入り

大石内蔵助恨み節



おもろないもん

おもろく生きる

漫才吉本

天下り

高杉新作リクルート



拗ねて出てこぬ

厄介カミサン

みなに頼まれ

裸踊り

天岩戸ストリップ



女の涙を仕分けてみたが
嘘か真か分からぬ

さくら

嘘も誠も流れる涙
おなじ身の内

しよっぱいさ

ゆうほ



誰も訪なう 事無き庵

おまえ用じ込め 愛でている

遊びびと

君の心の 庵の中で

住めりや嬉しい 夢中庵

ゆうほ



今にも落ちそな 涙を見れば

愛しさ募る 恋の道

さくら

人魚の涙は 真珠になって

お前涙は 恋の玉

ゆうほ



薄く粧い 深夜の宴

主の好みの 笑み添えて

遊びびと

惚れたおまえにや 何かじゃなくて

俺の全てを 添えるだけ

ゆうほ



近頃涙も

あんまり出ない

そろそろ涙腺 枯れたかな

さくら

涙白露

枯れ果てたのに

何で枯れない 浮気草

ゆうほ



ソロバン勘定

しっかりするに

恋のかけひき

できぬ野暮

ゆうほ



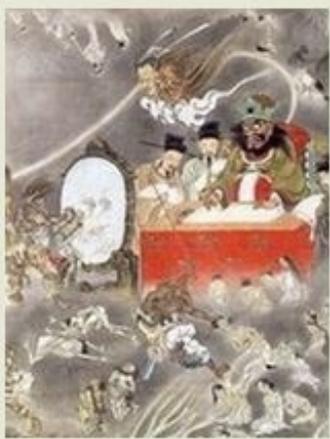
金が仇と

三途の川へ

ここも六文

渡し賃

ゆうほ



熱くでるもの

瞬間湯沸かし

出つくしや冷たさ

手が切れる

ゆうほ



あの夜ふたりで
手つかず道を

無理に通した

君が良い

ゆうほ



男は心だ
顔ではないと
切った啖呵が
すでに負け
ゆうほ



女演じる

仕草に色気

何故に習わぬ

うちのかか

ゆうほ



ワシコイもち

食堂街を

悩んでやっぱり

ワシコそば

ゆうほ



小鼻ピクピク

エレベーターで

尻を押さえて

顔見あい

ゆうほ



女家つき
男は人に
ついた所で
風が吹く

ゆうほ



切ったはつたと

命はぬしに

預け意のまま

恋切絵

ゆうほ



ほのかに残る 女の色香
袖口抑えて 酌をする

さくら

抜いた襟足 主の目奪い
恋の仇を ざぼう抜き

ゆうほ



徳利持つ手の白くて細い
夕顔咲いてる 路地の店

さくら

徳利飲み干し まだあるはずと
手で擦っては 猪口に受け

ゆうほ



雨の雫で 作った曲は

今夜はワルツで ふたり酒

ワルツ踊れば 拍子もあつて

関に持ち込む 三拍子

さくら

ゆうほ



雨が止んだら お帰りなのね

もっともっと 降ればいい

さくら

やらす雨なら 主そのまま

主がいたら わたしや濡れ

ゆうほ



さつきの出来事 見ていたように

つわぶきの景の てらてらと

さくら

日陰育ちの花さえ意地が

あなたのお陰 実をつける

ゆうほ



いつも、読んで頂き有難うございます。

一覧表

ゆうほ作 ちょっと危ない色艶都々逸Part1 短冊完結

<http://p.booklog.jp/book/18432>

ゆうほ作 ちょっと危ない色艶都々逸Part2 短冊完結

<http://p.booklog.jp/book/18285>

ゆうほ作 ちょっと危ない色艶都々逸Part3 短冊完結

<http://p.booklog.jp/book/20624>

ゆうほ作 ちょっと危ない色艶都々逸Part4 短冊完結

<http://p.booklog.jp/book/21269>

ゆうほ作 ちょっと危ない色艶都々逸Part5 短冊完結

<http://p.booklog.jp/book/22137>

ゆうほ作 ちょっと危ない色艶都々逸Part6 短冊完結

<http://p.booklog.jp/book/23574>

ゆうほ作 ちょっと危ない色艶都々逸Part7 短冊完結

<http://p.booklog.jp/book/24721>

ゆうほ作 ちょっと危ない色艶都々逸Part8 短冊執筆中

<http://p.booklog.jp/book/25380>

6月1日から Part 9をご覧ください。

<http://p.booklog.jp/book/27137>

ゆうほ作 ちょっと危ない色艶都々逸 文章編 執筆中

<http://p.booklog.jp/book/17722>

両本とも毎日更新連載中です。

ゆうほ 5月31日 ペナンの海の上より

ちょっと危ない色艶都々逸笑って許して！ Part8 短冊本

<http://p.booklog.jp/book/25380>

著者：ゆうほ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/uoboat/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/25380>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/25380>